

ひとりの家

鈴木捷万

「おかえり」がない家に
「ただいま」と言ってみる
玄関の扉を閉める音が
妙に大きく響く

帰る場所はここなのに
帰りを待つ人はどこにもいない
「いってらっしゃい」と見送る人もいないのに
なぜか「いってきます」と
小さな声でつぶやく朝
その声は虚空に消え
誰にも届かないまま

ひとりで過ごす時間は
ゆっくりと、しかし確実に
胸の奥の静寂を広げる
遠くで遊んでいる子供の声
時間を刻む時計の針の音
どれも私の孤独を埋めてはくれない

かつては賑やかだった食卓
笑い声と湯気の立ち上る景色
それが普通だったはずなのに
今では静けさがそのすべてを覆い尽くす

記憶の中にあなたがいる
笑いながら、手を振るあなた
その声も、表情も
触れようとするたびに
霧のように消えてしまう

忘れることが怖いのに
覚えているのが痛い
そんな矛盾を抱えたまま
私はこの家で生きている

「ただいま」と言えば
心の中のあなたが返事をするような気がする
「いつてきます」と言えば
あなたが微笑みながら送り出してくれる気がする

でも、それはすべて幻だ
あなたが戻ってくることはない
私の呼びかけに
答える声は失われたのだ

いくら暖房をつけても
この家の空気は冷たく
あなたのぬくもりさえ
少しずつ消えていく
手のひらに残る感触も
いつか風に流されるだろう

あなたのいない部屋で

一人つぶやく

「おかえり」も「ただいま」も

空虚に響くだけ

扉を開け、また閉じるたびに

心の中の空白が広がる

明日も同じように

この家に帰るのだろうか

けれど、あなたがいないその重さを

私はずっと抱えていく

誰にも届かない「ただいま」を

今日もまたつぶやきながら